

無
免
許
琉
球

清
水
ら
く
は



喜屋武岬

無免許な私は、バスで旅立つ。ガイドブックにもバスを乗り継いでいけば、と書いてあった。早朝出発。狭い道をあちらへ曲がりそちらへ曲がり、たっぴりと時間をかけてバスは糸満へ。次のバスを待とうと時刻表を見る。……絶望。一時間以上ない。

「バスないよ」

タクシーの運転手に声をかけられる。何人もの旅人がここで絶望したのだろう。ここから先はタクシーの旅になるようだった。

まずは喜屋武岬へ。標識とは違うルートで進んでいくタクシー。プロっぽさを主張しながらタクシーは坂を上る。

岬へ。

本島で一番南。この先は台湾だよ、と。戦争の時はここから飛び込んだ人がいた。あのひび、見てみて。砲撃された跡。



風が強い。歴史の欠片を、胸に吸い込む。

平和祈念公園

車は少ない。九月終わり、大学生だけの夏休みに。

運転手が連れてきたのは、平和祈念公園。横長の資料館。
静寂以上の静かさを感じた。祈り、念じる。平和を探しながら進む。

知らないことや、知っていたけれど覚えきれなかったことや、知っていたつもりになっていたことたちとの対面。

資料館を出たら、広大な海が目に入る。誰もやってこない。遠く果てにあるというニライカナイは当然見えない。



沖縄そばを食べ、サーダーアングギーをもらった。しばらくサーラーアンラギーだと思っていた。

グラスボート

タクシーは海沿いの道を突き進み、浜へと。

勧められたのはグラスボート。船の底が透明になっており、海の中を覗くことができる。泳げない私にとって、透明なガラスの向こうに広がる世界はとても新鮮。エサで寄ってくる魚よりも、ありのままの砂地がまばゆい。

カップルたちが楽しそうだ。楽しめばいいよ。



船から下り、海水を触る。思ったよりも冷たかった。

戦中、人々は地下に逃れた。
軍ですら、地下へ。

信じられないほど多くの人々が、狭い壕内にいたという。
壁に残る破片の跡。自決の跡。

一つの確信を抱いていた。人々は信じられない行動をしたのではない。
信じないことで、そのようにできる自らを見つけたのだ。



ここに連れて来てくれたタクシーの運転手に感謝する。
那覇に戻り、財布を落とした。それを見ていた人が教えてくれた。十秒間の危機を乗り越えた

。

首里城

首里城はバス停からも駅からもそこそこある。
実はバスに乗り間違えて2キロ以上歩いた。

かつては多くの城があり、多くの王がいた。
その中で現在まで伝わる首里の城。

坂を上っていくと、石畳に石垣。流石にここは観光客も多い。
意外とひっそりたたずむ守礼門。



疲れた。辿り着くのが大変な城はきっといい城だ。

宿から10分。早朝、那覇の街を北へと歩いていくと、そこに港がある。
歩道が海に浸食されていた。テレビカメラが回っている。珍しい現象のようだ。

釣具屋でチケットを買う。突然決めた離島への旅。



想像よりも小さな船。宿で出会った人は「とても揺れる」と言っていた。
七人ほどの客を乗せて舟は出た。
が。

「風が強いため、引き返すかもしれません」

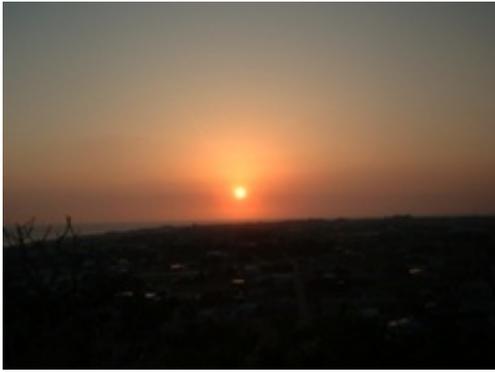
波は沖に出るほど強くなる。時折船が宙を舞う。
若者は顔色を悪くしてしゃがみこむ。年配の方は元気だ。慣れているのだろう。

幸い、引き返すことはなかった。20分遅れで、伊江の港に着いた。

城山

宿で知り合ったお兄さんと、城山へ向かう。彼は原付、私は自転車。
田んぼと畑、牛舎に基地。平坦な島にただ一つとびぬけた切っ先。

登山口からは徒歩。しがみつくようにして登っていく。
山頂に着くと、丁度夕日の時間だった。



海に溶け込んでしまうのではないかと思った。

山羊

山羊がいた。



ただ一頭繋がれていた。

伊江島

空がどこまでも遠く。
沖縄で初めて入る、海。
遠くのホテルのビーチが見える。区切られた白。



泳げない僕は、小さなものが気になり始める。
貝殻。サンゴ。ヤドカリ。小魚。



波が幾度も往復している。
永遠に飲み込まれないように、視線を動かし続けた。

チビリガマ

待っても時間通りに来ないので、行先を決めずに来たバスに乗る。
次のバスがなくて、基地の周りを歩き、また来たバスに乗り、また歩く。
気が付くとサトウキビ畑の中。

下っていく階段があった。
ぽっかりと空いた穴と、看板。
中には入れないようだった。
祈りの千羽鶴と、心無い人に対する警告文。



まだ終わってはいないこと。

海沿いに広がる、洋風の街。

それは、偶然でもなんでもない、アメリカ風の街。

観覧車がそびえている。ベビーカーを押しながらジョギングする外国人。



のぼりが立っている。中日がキャンプをしているようだ。

スーパーに入り、食料を買い込む。私はただ、通り過ぎるだけだった。

万座毛

「地元の人には来ないねー」

レンタカーに観光バス、お土産屋さん。

遠くに見える岩は、確かに象。

それより、海が綺麗だね。



名護バスターミナル

バスで移動するので、待ち時間はどうしても生じる。

名護バスターミナルで、数時間。ご飯を食べ、日ハムのキャンプを見て、まだ時間が。バスを見ているだけでも楽しいのだけれど。



バスが来た。乗客は、高校生と二人。

海沿いの道から、山の中へ。

やんばるは冷え切っていた。

強い風に倒されたのだろうか、傾いたバス停に、そのまま時刻表が張られている。



宿は、広すぎる部屋に一人きり。

夕食、地元のおじさんたちが訪れている。何を言っているのかまったくわからない。

深い暗闇が、落ちていく。

天気は雨模様。

ヒルギ林の小道を、会ったばかりの四人が進んでいく。

旅人の三人と、案内の青年。

濁流からにゅろりと伸びる木々。時折姿を魅せる蟹。



続いてカヌーで川を上る。夏は気持ちがいいらしいが、今日は異様に寒い。

落ちるわけにはいかぬ。

温かい部屋に戻ってくると、青年が三線の音色を響かせてくれた。琉球に染まる。

座間味

また、突然思い立ちフェリーに。

穏やかな波を越え、連なる島々へと入っていく。港を下り、自転車を借りる。
静かな道を上っていく。



爪痕は、記録されている。眠る魂たちに、頭を下げる。
展望台に着く。遠くまで、世界は続いていた。



役場を回り、続いて土産物屋へ。クジラの描かれたエコバッグを買った。

後書き

沖縄を旅するには、レンタカーが良い。

しかし私には免許がない。

制約の中での旅。バスや船を待つ時間にも、見えてくるものがある。

何回か訪れるうちに、モノレールができた。空港から街までは随分と近くなった。

それでもその先は、無免許には、随分と遠い。

安宿では、不思議な交流が生まれる。関西弁が溢れているときもある。

ある人が言った。「一か月いて、一回しかキスしてない。おれ、頑張ってるよ」

まだまだ訪れたい場所がある。旅は繰り返される。